

きんから かからの世界

明治時代の装飾和紙
きんからかわかみ
金唐革紙

百年の時を超え、よみがえる。
精巧な版木から復元された額絵の数々

2026年4月8日(水)～5月25日(月) 築きのもり 築上町図書館

金唐革紙の歴史

ヨーロッパの宮殿などの壁や天井に使われた、革に金属箔を張り、文様を彫った型でプレスして彩色された工芸品が、17世紀半ばオランダから日本に輸入され「金唐革」と呼ばれ、刀の柄や馬具、煙管入れや手箱などに使われた。

明治時代初期、日本で革の代りに和紙を使って制作し、明治6年(1873)のウィーン万博に「金唐革紙」として出品され好評を博した。これを契機に明治12年(1879)大蔵省印刷局で製造が始まり、鹿鳴館や公共施設等の壁紙に使われ、また海外にも輸出するようになった。その後、制作は民間会社に移管され、明治30年代初頭に生産のピークを迎えたが、コスト削減や大量生産による品質低下で、昭和初期の国会議事堂の壁面を最後に衰退し、その技術も途絶えてしまった。

旧蔵内邸の金唐革紙

明治39年(1906)頃建築の旧蔵内邸一階の仏間内陣と二階床の間の壁と天井に貼られた金唐革紙は、その図柄や彫りの深さなどから金唐革紙の躍進期の明治10年代後半、「鹿鳴館時代」の精緻な版木を使用して作られたと考えられる。現状は経年変化により酸化して色はくすんでいるが、大柄な花唐草文様を全体に配し、地模様には細かな花唐草文をあしらった金唐革紙の優品である。エンジ色の地色はスクリーンを使って彩色したと考えられる。

2013年に金唐革紙を復元制作するため、金唐紙研究所前代表の故 上田 尚氏(国選定保存技術保持者)に依頼して、壁紙から模様を写し、サクラ丸太の古材にノミと彫刻刀で文様を彫り、版木棒を復元した。金唐革紙の製法は、楮紙と三桠紙を貼り合わせた和紙に錫箔を貼り、湿らせてから版木棒に当て、刷毛で叩いて模様を浮き出させる。次にワニスを塗り重ね、乾燥後に絵具で着色して仕上げる。